

林文子先生を偲んで

健康文化への熱意

玉木 武

「健康の森」構想の実施計画できりぎり舞いしている頃でした。

今の「健康の森推進局長」の小林さんが、森準備室の課長でした。「部長、是非健康関係の財団を作りたいという方がみえまして、できれば早くお願いしたいとのことです。名大の佐久間先生のご紹介です。」小林君のこの報告に対して、私の「健康関係の財団は数多く出来ているし、事業目的はなんなんだ？佐久間先生はなんとおっしゃっているんだ？」と言うやり取りが、林先生とのお付き合いの始まりでした。

当時、県の段階での財団法人作りには、1億円の資金が必要と言うことになっており、そのお金はどこから？ということが、まず問題でした。ところが林先生からご自身の私財の全てをこの財団作りに投じたい、という意向を伺い、林先生に何か必死な執念のようなものを感じとったものでした。

林先生は県の方針を聞きながら、それを参考にして財団の目的や事業も考えたい、との意向を示され、また佐久間先生の強力なお気持ちも伝わってきました。

健康関係の公益法人は数多くあり、枚挙にいとまがありません。その名称に先ず困りました。「今、欠けている健康問題の事業は何か」ということも勿論、名称にもかかわってきます。

「健康の森」構想には、文化が必要だというのが私の持論でした。文化とは具体的にはなにか、まだ良く整理されてはいませんでした。いつも頭のどこかにその問題は燻っていました。たとえば、森構想には巨大な施設の配備と、それらの機能的な連携が必要です。機能だけでは、県民にいずれ飽きられるだろう、また他により機能化した計画も実現されるだろう。しかし、全体の調和美を含めた、文化の香り、芸術的な雰囲気、生の喜び、健康努力への意欲、といったものがうけとられる、科学やメカのみが機能的に集中した「森」を超えるもの、精神的な満足感をみやくみやくと感じさせる「森」。そのような抽象的なものでしたが。

しかし、多少の持論はありました。例えば、「森」の中を歩くだけで、建物の外観、遊歩道や木々の配置などに、中世のヨーロッパ風の雰囲気、京都の庭園をしのばすたたずまい、歩くことや走ること、さらに健康について考えを及ぼ

す意欲を自然に感じさせる「森」の魅力、と言ったようなところを作ることは出来ないものか、などでした。

そのころ、月並みな気もしましたが、健康という抽象的な「もの」を、なにか、即物的なもの、長生きや病気にならない、検査データが改善された、体力がついたなどのものから開放される、もっと心やすらかな心の高揚する「健康」への考え方や行動、を期待する気があったのです。それらは、芸術や読書や、芸ごとなどに求められるものかもしれませんが、しかし肉体と精神の健康に、もっと具体的な文化が欲しいとの願いでした。

先生は志し半ばに、逝かれました。残念でなりません。

もっとも先生のお気持ちを拝した方々でその後も、この財団は運営されていくことでしょう。永遠のテーマ、『健康と文化』は、関係する皆さん方の中で、先生との対話はつづくことでしょう。心より先生のご冥福をお祈りいたします。

(総理府公害健康被害補償不服審査会委員)